

親父どの おやじ

秦野市支部 清野 道郎（子）

戦没者 清野 知栄

戦没地 フイリピン

私の親父は三十歳にして召集され、稲穂の出始めの頃、七月三十日緑一色の山形県小国の故郷より出征して、八月一日舞鶴入隊、それから佐世保の港から戦地へ出て行ったきり二度と日本の土を踏むことも無く、遠いフィリピン・コレヒドール島で戦死しました。

戦死の公報と白木の箱には何にも入ってなかったと聞かされました。実際にどの様な所で、また本当に戦死したのかも全然わからないまま二年程過ぎた頃、たまたま同郷の人で同じ部隊で戦い運良く生きて帰って来た人が居るとどこかで聞いて祖母がたずねて行ったら、本当に同じ所で戦った人だったそうです。祖母が色々聞いた話として、私が中学生になった頃に話してくれました。佐世保から出航、途中敵に遭遇することもなく上陸することが出来たそうですが、海軍が陸に上がっても？昭和十九年頃は戦う武器も乏しく、敵の攻撃にジャングルの中を逃げまわっている様な毎日だったそうです。戦死した二十年一月二十三日、大変いい天気で食べるものを探してきて、車座になつての朝食後、自分達の故郷の話で楽しいひと時に敵の爆弾が真上から落ち

て来て、三十人位の中で運良く助かったのは三人程だったと話してくれたそうです。そんな中で、運良くその三人の中の一人が同郷の人だったので、私の親父の最期を聞く事が出来たわけです。私は中学卒業後、自立する為に今の職業（タイル職）に就きました。小さかった頃は家には祖母、叔母二人での生活でしたが近くの親戚の人達、成人となってからも好きな人達に恵まれ、親がいなくても寂しいと感じたことは少なく過ぎして来ましたが、時には、こんな時、おやじが生きていたら何んて言うのかな、なんて思うことはあります。

私は走るのが好きで、各地でのマラソン大会、仲間で参加する駅伝大会などで走った夜など、「おやじ、今日はゴール前で一人抜いて入賞出来たぞ」とか、また「俺が応援している所でお前二人に抜かれ駅伝メンバーの人に対して自分が申し訳ない様な気分になったんだからな」そんな話をし乍ら酒を酌み交わすことが出来なかったのがちよつと残念だったことです。

私も親父の倍以上も年を取りました。親父のお陰かも知れませんが、いたって健康で楽しく毎日過ごしています。あと何年後かわかりませんが、私があの世とやらへ行った時に運良く親父に会えることがあります。そちらの世界の先輩として手招きして下さい。私は親父の顔はたった一枚の写真でしか知りません。また呼びかたも、どの様に呼んで良いか迷います。「父上」、「おとうさん」、「おとう様」やっぱり「おやじ」と呼ぶことにします。その時は私の知っているふさと（ふるさとん）のこと、今の日本のこと、私の子供や孫のこと、おやじの孫、曾孫のことなど話して聞かせます。いつの日になるかわかりませんが、その日が来るまで私はこの世で頑張っ

って生きます。